

〔ひとつの現実〕 オートメ乙女

『朝日新聞』 1960 年 4 月 17 日（日曜日）13 頁

大阪府茨木市の某テレビ工場、工員 2500 人のうち 6 割が女子工員、乙女が多いオートメ工場だ。コンベヤーによってテレビのシャーシー（基盤）が整然かつゆっくりと流れてくる。女工員はしがみつくように作業をつづける。配線工程なら作業台の幅 40 センチの距離を 60 秒で動くから、その間に何種類かの線をラジオペンチで手早く取り付ける。チャプリンの「モダン・タイムス」みたいだ。これはさぞ大変な仕事だろうと思うが、女工員たちは、仕事を覚えると手が自然に機械の方へ動いて苦にならんといった。

8 時から始まって、10 時になると 2 分 30 秒の休憩。ピタッとコンベヤーが止まる。作業台にヒジをついて、ロダンの「考える人」のスタイルが並ぶ。12 時から 45 分間の休憩、この間に食事とトイレ。午後 2 時半からもういちど 2 分 30 秒の休憩があつて、4 時で作業が終わる。

単調な仕事で手だけを機械の一部のように動かすから頭が退屈する。ある女工員は週の前半は前の日曜日に見た映画を頭の中でくりかえして過ごし、あとの半分は次の日曜のプランを頭の中で楽しむ。トイレにゆくのも条件反射みたいになって、日曜にピクニックに行っても、正午になるとトタンに用を足したくなるそうだ。

かくて月産 6 万台。近代的なオートメ工場の一方に経営者の信仰する竜をまつた神社がある。みどりに囲まれ、厳として、面白い対照だった。

写真＝コンベヤーによって次から次へと流れてくるシャーシーに手を休めるヒマもない女工員さんたち＝茨木市のテレビ工場で

作成協力：Ogawa T. 2013/07/18